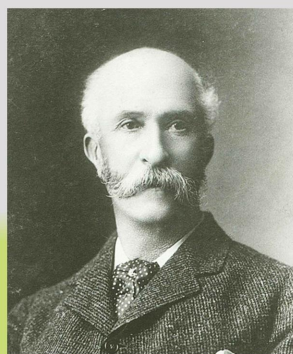


幕末の冒険商人 トーマス・グラバー

nagasaki topics



トーマス・グラバーは1838年、スコットランドで生まれました。青年になったグラバーはイギリスの貿易会社ジャーディン・マセソン商会に入社し、1859（安政6）年、21歳で開港した長崎にやって来ました。

長崎に来たグラバーは20歳前半の若さで、ジャーディン・マセソン商会の仕事を担うことになり、1862（文久2）年に大浦にグラバー商会を設立しました。

グラバー商会では生糸を輸入し、西南諸藩の求めに応じて布類や香辛料、鉄材などのほか、中古の蒸気船や武器を輸入品として扱いました。長崎のイギリス領事の報告書には、グラバーは日本語が上手で、日本人とも親しく、尊敬もされていると記されています。来崎して間もない若い外国人が日本人と商売の取引ができたのは、日ごろから日本人との交流があったからと考えられています。

グラバーが行ったことの1つに、蒸気機関を日本に紹介したことが挙げられます。1865（慶応元）年、グラバーは大浦海岸通り（現・長崎みなとメディカルセンター前）に数百メートル線路を敷き、日本で初めて小型の蒸気機関車の公開運転を行いました。そのほか、薩摩藩の五代友厚や小松帯刀と共に、蒸気機関の力で大型船を陸に引き上げる修船場を、小菅に建設したり（小菅修船場）、高島で佐賀藩と共同で蒸気機関

を導入した西洋式炭坑（高島炭坑）を開発したりしました。

また、グラバーは日本に西洋の技術を導入するほか、海外留学を目指す日本人たちも援助しました。1865（慶応元）年、薩摩藩より五代友厚を含めた19名の日本人がイギリス留学のため密航しました。この当時、日本人が海外に出ることは禁止されていたが、海外で学ぼうとする日本人たちをグラバーは助け、19名はグラバーが手配した船に乗りイギリスへ向かいました。留学から戻った彼らは明治期の日本で活躍しました。

41歳の頃、グラバーは三菱の顧問となり、徐々に活動拠点が長崎から中央へ移ります。横浜では現在のキリンビール株式会社の前身会社となる「ジャパン・ブルフリー・カンパニー」の設立、大阪では「大阪造幣局」の設立にたずさわりました。

グラバーは、晩年になっても東京の自邸から三菱の会社に出勤し、会社のイベントや行事に出席しました。また71歳の時、明治の日本の近代化に貢献をしたことが認められ、明治政府より勲二等旭日重光章を授与されました。

1911（明治44）年、グラバーは73歳で死去しました。グラバーの葬儀は東京と長崎で行われ、どちらも国内外から多くの人々が出席し、彼の死を悼みました。

現在、旧グラバー住宅は日本に残る最も古い木造洋風建築であり、国の重要文化財にも指定されています。また2015年にはグラバーが導入した西洋技術の施設（小菅修船場、高島炭坑）及び旧グラバー住宅が、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼・造船・石炭産業」の構成資産となりました。グラバーの功績は、旧グラバー住宅の世界遺産登録により、世界中の人々に伝わっています。

（写真・資料提供：グラバー園）